

一五  
薩割從來抄

上



157.3  
508  
Vol. 1



不 郎

庭訓雜抄序

夫佛法五法と修りし事一に兼れ智信と云ふ

ひそふれんまれの徳文氏之二字はついで又常之源

を以てしをらゆらんとなれど又仁義礼の二列と云

夫が知信之二義とあり守憲とありて三國傳燈と所

謂文名佛法と建立し一減罪生善之巨益也夫が

元王法之在也法教とありの國例と護念と一釋業

を礼と也就中又道とありるまの月氏乃興

之皇威且此魏文日遊の聖徳也是等のれ之徳に依て

世廟を制也又審則又王法昌也為文徳制の國

家ゆへに皇徳也皮成士の徳天地環海相望の時

不 郎 印











只延引似分号長橋花花園小野遊日

新頃向中言公業 取致禮介と子日の遊く方を  
念におはすは我朝お日とつ

ふ事子れ日とけり り不用りゆ人よ正月一日と来くこと云也  
法々の業へのりて勅を命と云ふ事今とあるふこまゆる

日中元 将又楊ら菴小ら勝貞益兼小  
あれあり

富之 ま若は康次物遊二十と九と爽酌茶  
の

曲 まは道日打續治兼之  
の

校 おありとて廣場りてをを和しうりり  
うと及敷上人の鉄し中とのや二三七すじの的と守り

中にけり る方世といて初と製物の事と馬場と二町を  
一とて中に海と河通とありともどり上下お馬お入乃大儀  
をありをれをわざりともをい入のかり三角おさるし  
乃大事はしわがらと器中お樂を的とありし物づくし小  
事之會の大方と武士も射紙を甲おさるしとてち守のく  
お掃てき遠近を家にお掃てら杖はさるしちよ康このお  
事の本をしてゆり廉し又器の形と化て雉の羽山鳥の川尾  
なりしりして馬場とくよりりうらわがとなてまらりて初あり  
かて書をよんこととまれながらお終とをりしとらひらとらり  
公家の志違の態し賣物乃事一とゆりのびく一上事  
下より一尺二寸中九寸下七寸七寸七寸七寸七寸七寸七寸  
られをらる物と賣物をありと云事とを移し三と九と手  
賣の云事何れらありと云事と九分のれ後あり八の  
事い馬場と六町おありと云事とと云りしあれと八の















長んとして男がたつてつて夫に所れが村成之を  
 をけりしとせん故よば夫とのいりたりか中流に有け又暮目と  
 以事のくふ目い夜ひつ物しより物をさるるのい故あり  
 化生乃物と相しと暮目と云しげこれ鬼の眼と相  
 と云か天竺の鬼取あつふ山をい山の中八回鬼とい鬼を  
 取鬼とい出ていあつく人をとる事殺す人とい其山のうりに  
 江のいと云剛は舊宮あといひいありありたくさうい事  
 大衆といつうがといふれが取のま事日月のまありい  
 或時むらあつて伴乃鬼の通つあとおとまれとい種一  
 になれて酒共ふたりそれらひひいこりいりる  
**種一**  
**遊** 遊公在中課役賦引物多事主本  
**三** 種一遊公在中の課役賦引物種一遊の事種  
 を持ろつて種一花一枝に賦引換物(在中)の事

小依てうろふし引物  
 是又類ま乃わあせし  
**由** 可取得所意可事  
**物** 名之回不及一二体物而湯之付水  
 消とい而いけくといゆんいんいんいん  
**恐** 恐と傳云

正月六日

石見守中丞

洋上源九清門有殿

而深之境中終之遠恨如山河時教

意務事

而存之後とい書教とい遠恨いとい  
 とい事とい久といひといひといひといひといひ







不之花を素物俵僕雑合初之を流之  
 名を以て以て之思を以て維をた道  
 之様以て其神之形明後日其同心は  
 望也 親の下好士法家の任仁といふ事ハ其以て代り  
 親に本あり知主相とて連一けり云とあり一と云  
 られ一は望ありんがりとありまらして會と仁具と兼  
 一とありて其其の好士といひなり一たり一は任仁といふ事  
 余の事と持て花ふふといひ一其の後世とも目ふり  
 ぶじ親のいふふよりしてらるひり人を任仁といふなり  
 見ん  
 連款ふ道相款達志一其家可有御

誘引は其次は徳向之徳因亦是依破  
 飛出箇等を境を可法乃視懐紙  
 為可法懐中於其心慮之也雜畫紙  
 上傅期兼會之次 此方の宗色に考れを志と  
 有事ハ今れせふも有じ人  

 帯に知をもち事一は縁白といふ事ハありて一は縁白を用  
 かりぬがあり上代よりけりまらり字と一字の縁白にて  
 四八八八高かんどり小に破舞小竹管等ハ海霜と入所  
 ありとのいほの人もあり事一は視懐紙馬ハ懐中といふ  
 事一上代より花と御月とたりしるを示して所を詩  
 弄とせり一は視懐紙をこらよ入て時人持合のあり不よ







庭系花は深山に咲けり之極の地也も花の在るよりしりあつた  
 由美介は在る園にありてその花を赤い庭に深山に目移りし  
 かりし山と打遊戯してを深山に暮れおぼしめされ山に暮る木た  
 おもゆる山にのりおもしろがりたる山に暮れとみおれをけりとも  
 ともくもあまの物もむむじりけりともくもなんどんたわわ  
 ありしとよりしに極そあめりたるにむじりけりもあはれは後  
 にも花を愛するそつたがふも **若今明之間を暴**  
**風霖雨** 昔會書也 因方行時急なる  
**冬** 好也 暴風と吹あはしく吹風霖雨といふありくと風は  
 冬より雨は冬より好おれのころつらあを花はあつた  
 さいしりし物かした又あはれりて向しり物も好しや  
 ともあつたふゆて紅まきふ老ら物も風よあはひて

ちやうやくもあつたりとりかや又あはれりて風雨よ花はあ  
 りしころんかたは好しとりあはれりて後園に暮れおれの深山に暮  
 れる極の地也も花の在るよりしりあつた  
 由美介は在る園にありてその花を赤い庭に深山に目移りし  
 かりし山と打遊戯してを深山に暮れおぼしめされ山に暮る木た  
 おもゆる山にのりおもしろがりたる山に暮れとみおれをけりとも  
 ともくもあまの物もむむじりけりともくもなんどんたわわ  
 ありしとよりしに極そあめりたるにむじりけりもあはれは後  
 にも花を愛するそつたがふも **若今明之間を暴**  
**風霖雨** 昔會書也 因方行時急なる  
**冬** 好也 暴風と吹あはしく吹風霖雨といふありくと風は  
 冬より雨は冬より好おれのころつらあを花はあつた  
 さいしりし物かした又あはれりて向しり物も好しや  
 ともあつたふゆて紅まきふ老ら物も風よあはひて

和歌多雜拾人丸赤人と古風未究長秋  
 短歌逢歌混中折り香冠之風情輪迴  
 傳述行世落題之評  
 石見乃國とてはもとくもあつたりとりかや又あはれりて風雨よ花はあ  
 りしころんかたは好しとりあはれりて後園に暮れおれの深山に暮  
 れる極の地也も花の在るよりしりあつた  
 由美介は在る園にありてその花を赤い庭に深山に目移りし  
 かりし山と打遊戯してを深山に暮れおぼしめされ山に暮る木た  
 おもゆる山にのりおもしろがりたる山に暮れとみおれをけりとも  
 ともくもあまの物もむむじりけりともくもなんどんたわわ  
 ありしとよりしに極そあめりたるにむじりけりもあはれは後  
 にも花を愛するそつたがふも **若今明之間を暴**  
**風霖雨** 昔會書也 因方行時急なる  
**冬** 好也 暴風と吹あはしく吹風霖雨といふありくと風は  
 冬より雨は冬より好おれのころつらあを花はあつた  
 さいしりし物かした又あはれりて向しり物も好しや  
 ともあつたふゆて紅まきふ老ら物も風よあはひて











不可收混乱地不收改改精農農之改法

之条奉公忠勤也 四部侍所より改保台庄山河  
田高より改保台庄山河

此乃さうひにまはらうしうすをそむるのりひへいさし行  
所之殺むるさういんをそむる混乱を及みされまふと

改に我庄人の平境へ平均がうとんやとんれのみまにいつく  
さうひもさうせりしよ法むるを混乱と云いりひをそむる

改ひへ一精農と云いさうれ領に我領とも人よ改とありと  
らむむと人のかともさうさうめりしうぬと精農と及みと

厨税飯者相遠り早課改法人等地下

目取取法以下文書等併納法之注

文書可收石進や官徳之書源田之

漢乃形制可收注進交名也 厨と云ふ事  
なりやせんこ

て精捕一かざる暇に領主入領の内百姓よりいさう事  
既飯も同系に地下の同領はまふ事はゆかりある文書に形

之田地を記し修て文書は可い併納細法はたこのは改あり  
物かんらうしう事と書徳之書はこれらう右相と云方へ

此乃事もたうと公田と云ふしりりの徳田之漢も又田高と  
くともいふ改のまひいそふ形制をさうすこと改名と注

をとりし書  
をもちあり

且東地業事と相水早之年

頃計速迫之地改改下勢有可開也



之地方拓者農人之家發之在可任用  
 水之使るを為る民之役可修園地并海  
 也 且東地業一且と云事ありのしくと云現し東地業一  
 事いひくはくらりの日うと云事いふは東より  
 ありし輕き也し方物を去る先其家平と云り又東と云り  
 ひの方と云て是はまするあり其家平のりて東地業と  
 ありしら後穀乃中よ東よりりて才一と云生去りし  
 りそたれと云らと東乳味の方ありありひ右方  
 又東よれそいひくは後方し水旱より毎降り水おひて  
 ありしと地一ありと云事と云こ云事推しは云ら乃  
 らと云としく佃して耕也せしと云運田の佃内正作  
 地一と云はれしと云事あり  
 佃内正作

之初去條迫地撰契田其今下し  
 佳子農料促佃水梨等其具今耕  
 他種精早稻晚稻小西收的可取春  
 法改得 佃と云は地乃田と百姓とて作と云と云ん  
 ちと云と云し内中作と云は我と云と云らありと云  
 佃田しはは田畠耕他と云と云りと云は天也と云不  
 人ゆりんと云り又聖古大王の西子田を他りけり  
 又聖沙門乃ゆりんと云りは西のりしは多門天王の  
 戸摩那城と云毎日白米のありはは西子田なり田乃  
 津と云と云らひは地いびやりんと云くありて地と云  
 云らはははらと云事種の内は又珠りらら苗の内を  
 又聖沙門乃ゆりんと云りは西のりしは多門天王の城は味



地身がら縮の時に屋室を蓋す葎板をかきつりたる時にわかんが  
 たる飯の時に親世者やうりやうりやうりやうりやうりやうりやうり  
 乃由金村の御淋神の言風とてひひとあまのりやうりやうりやうり  
 縮し西収の時に春法の政ぬとてふ事ハ行を縮し東と作  
 里くらうりやうりやうりやうりやうりやうりやうりやうりやうり  
 てあるよむらじらふに縮るは其用と云用し春法とては縮とが  
 ゆふ一抱一束二束と云一抱と書てハ一たんと云とらと一  
 束と書てハ一抱と云とらとらり縮とたんと云とらとら  
 肉小何あもやうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 空ろ用ては田中やうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 わると政ぬとてうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 ぢりやうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 あらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
**次昌幸 高妻 大屋 小豆 大**

**角豆 粟 麦 赤 余 稗 芋 苧 畑 山 昌 之 乾**  
**次可 課 素 代 加 地 子 並 毎 年 稗 拾**  
**之 以 収 以 不 可 好 自 由 依 怙**  
 も政ぬなれども、乾、稗、素、代、加、地、子、並、毎、年、稗、拾、之、以、収、以、不、可、好、自、由、依、怙、  
 かなうことよめりたうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 を能く出来てなうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 ありに収るやうの極時をまがひらうらうらうらうらうらうらうら  
 じと乾と乾と云は、稗と素と云は、うらうらうらうらうらうらうら  
 わらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら  
 りふに於て、素、乃、草、木、目、を、ま、ら、う、ら、う、ら、う、ら、う、ら、う、ら、  
 申に、い、わ、る、素、に、粟、の、木、に、用、木、に、素、と、ま、ら、う、ら、う、ら、う、ら、



とし英搦ハまことふかんぐんをさるまきし指のまよとばある  
と九よりあり英搦既の行も同とこ般てりありてと云詞の  
まをさる詞(依指)ハ 次法鍛造地事不可  
と云ひらしとんこ

有名別之地事なり早口方梅大

地其内可用云築地棟門唐門志

五斟酌之儀次内鍛造他一棟門ハ云志門法

樹のよまむやくくくも物とまらあり 在平山止去門

築造門之回可相計之宿殿志厚

萱蓮月板底廊中門後殿志重板

葺均右既舎右園燭書表之間字文

不么支所政府膳取共右所焚殿為

社倉四内倉棧為捷見志事書並送月

可支交之南向方道並敷馬場全指

浮田可築的山東面梅疏鞠之坪夜

種田可敷泉水之築山遺水任眺望















古書全雅行首良辰耕作系

家中地下文書事或給失或失

隱借乱之由汝法人為依持申延引

之兼忍以公事之實否又否責負校

等為被進可申注在也

書部と申す事しつおし日と撰(書) 貞原より朝の庵の時  
をまじりまふ子細を察中らん申とき文書事あはれあがごと  
し給失と云はれまされをせうとまきあつたはいとんりごう  
とら事し地下の文書はまされをせうとされを引乱あつら

と云しう極お地下のりく人書うのひそ事れ進進とのうの  
りく人と云はれ司公文使は後かんととそまきあつたう地  
下とけりらふと申してらくと云事書部はらるる一はあれ  
らるる我人よあつら振あつらりをらるる事本の事乃らるるい実  
之を我らくののりくは日とまき凡乃らるることまあつら事ハ  
いれおとあかうにいれといれこのあは事書まらるるあまうし  
まきゆらとまきいれいと書てぬとゆらとまららるるは書  
本の初よりまづくと河ぬりくわああまういれこのこのの  
あまきとむわくと河ぬりくわあまういれとまき被取のされまき  
しとあつたあまき一はとまきとまきとまきとまきとまきとまき  
乃らるるわらぬらるるありまきとまきとまきとまきとまきとまき  
もあつたあまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまき  
あまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまき  
まきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまきとまき







送行潘居所并送作行金物等周意

炭穢石若能治令遠き也次小地事ハ仍

有本らん急うの務務子カランとて小事子細あわさる

物末之察修理儀大工取果下巧道所

立礎石柱之精設材一者日方深ニ信

場取可取送下巧道と云事ハ大工番道の如ら若

暁高と云物小一者人あり 次樹木事梅桃等

楊梅枇杷杏栗柿梨子椎榛松榴棗

樹漢柚材椰子檜栗別檜金材柚茶心

之亦及令尊徳以畢於此日能取仰下

去法事有徳也又雖可申入子細

内於田畠名主店官為好野心之

回業之末落若能賣伏之後送系上

可申入令有可令被取送治也田のあり



























おしりてぬらうら雨とうんとそあいらくらく夜  
つてつわの肉とこれか何もがうらー<sup>不</sup>盡小酒せらくとき  
へらの是とねそ人よんれをくつさどいほとのびんかよりひ  
をのくやうひを儲とらうと天乃うんつさう云酒をい年月に  
りうひをばらう事なりーうれ馬風まのーいり人<sup>う</sup>羊<sup>う</sup>の  
市とつひめざういひよまらひ<sup>う</sup>うらうて市は酒とらふ事も  
あり又うらう市ーとてうらうらうらうら<sup>う</sup>成さず市もい<sup>ん</sup>国<sup>ん</sup>隊<sup>ん</sup>あり  
あれあーいりぞ馬風が直うら故にわ又市と六<sup>う</sup>侍<sup>う</sup>よとらう  
者ー我物乃事し<sup>う</sup>ま<sup>う</sup>徳<sup>う</sup>太<sup>う</sup>子<sup>う</sup>の<sup>う</sup>世<sup>う</sup>の<sup>う</sup>由<sup>う</sup>付<sup>う</sup>や<sup>う</sup>の<sup>う</sup>國<sup>う</sup>の<sup>う</sup>病<sup>う</sup>の  
里ありて市とまほひー<sup>い</sup>それ<sup>い</sup>者<sup>を</sup>侍<sup>お</sup>の<sup>の</sup>由<sup>あ</sup>ふ<sup>人</sup>の  
心<sup>う</sup>程<sup>う</sup>要<sup>う</sup>不<sup>う</sup>考<sup>う</sup>なり<sup>う</sup>不<sup>う</sup>依<sup>う</sup>て<sup>う</sup>佛<sup>う</sup>道<sup>う</sup>お<sup>と</sup>り<sup>う</sup>り<sup>う</sup>ら<sup>う</sup>ん<sup>う</sup>ぐ<sup>う</sup>あ<sup>う</sup>お<sup>う</sup>を  
乃<sup>う</sup>意<sup>う</sup>と<sup>う</sup>ね<sup>う</sup>ら<sup>う</sup>ー市<sup>い</sup>か<sup>う</sup>ーと<sup>人</sup>よ<sup>や</sup>と<sup>く</sup>賣<sup>路</sup>の<sup>い</sup>と<sup>や</sup>  
法人<sup>い</sup>ぶ<sup>ら</sup>て<sup>賣</sup>と<sup>買</sup>に<sup>た</sup>子<sup>の</sup>さ<sup>り</sup>く<sup>い</sup>市<sup>お</sup>た<sup>ん</sup>の<sup>物</sup>  
遊<sup>ま</sup>の<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>か<sup>て</sup>力<sup>と</sup>つ<sup>ー</sup>ー<sup>い</sup>嬉<sup>い</sup>を<sup>に</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>い</sup>む<sup>え</sup>ん

ぶらりあてえーこのあらん人おはせとく<sup>う</sup>賣<sup>と</sup>う<sup>ん</sup>と<sup>あ</sup>れ  
あひましかあがら<sup>い</sup>移<sup>を</sup>の<sup>い</sup>を<sup>を</sup>賣<sup>ふ</sup>に<sup>う</sup>あ<sup>は</sup>あ<sup>る</sup>跡<sup>を</sup>  
い<sup>賣</sup>と<sup>や</sup>ま<sup>う</sup>ら<sup>ん</sup>を<sup>ら</sup>と<sup>力</sup>と<sup>信</sup>り<sup>て</sup>の<sup>市</sup>な<sup>ら</sup>け<sup>ら</sup>  
ま<sup>徳</sup>太<sup>子</sup>天<sup>眼</sup>と<sup>り</sup>の<sup>て</sup>由<sup>使</sup>と<sup>て</sup>力<sup>と</sup>つ<sup>て</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>え</sup>ん<sup>あ</sup>は  
賣<sup>と</sup>う<sup>え</sup>ら<sup>も</sup>か<sup>れ</sup>た<sup>あ</sup>は<sup>賣</sup>を<sup>う</sup>り<sup>た</sup>ら<sup>う</sup>ー<sup>い</sup>馬<sup>風</sup>か<sup>ー</sup>  
あ<sup>ら</sup>く<sup>信</sup>を<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>ら</sup>て<sup>目</sup>に<sup>い</sup>市<sup>と</sup>い<sup>ひ</sup>ま<sup>は</sup>い<sup>ま</sup>  
を<sup>と</sup>ら<sup>び</sup>りの<sup>あ</sup>た<sup>ら</sup>う<sup>ら</sup>日<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>ま<sup>は</sup>  
ぞ<sup>人</sup>あ<sup>れ</sup>事<sup>と</sup>あ<sup>ひ</sup>て<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>ー</sup>い<sup>れ</sup>か<sup>六</sup>侍<sup>ー</sup>市<sup>人</sup>か<sup>は</sup>ら<sup>い</sup>  
お<sup>ひ</sup>り<sup>て</sup>は<sup>と</sup>さ<sup>う</sup>い<sup>な</sup>化<sup>ー</sup>賣<sup>と</sup>ら<sup>う</sup>て<sup>佛</sup>道<sup>よ</sup>引<sup>入</sup>ら<sup>ら</sup>  
路<sup>ふ</sup>じ<sup>馬</sup>風<sup>い</sup>賣<sup>れ</sup>ん<sup>ぐ</sup>ー<sup>い</sup>馬<sup>風</sup>佛<sup>道</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>り</sup>て<sup>ま</sup>ま<sup>も</sup>有<sup>ら</sup>  
せ<sup>は</sup>い<sup>と</sup>た<sup>ら</sup>ん<sup>と</sup>そ<sup>と</sup>ま<sup>や</sup>う<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>今<sup>れ</sup>せ<sup>ま</sup>て<sup>ら</sup>け<sup>は</sup>い<sup>て</sup>  
市<sup>の</sup>六<sup>侍</sup>ー<sup>い</sup>馬<sup>風</sup>是<sup>に</sup>勢<sup>市</sup>市場<sup>よ</sup>あ<sup>ら</sup>び<sup>と</sup>と<sup>祝</sup>事<sup>ー</sup>  
子<sup>細</sup>を<sup>ま</sup>徳<sup>太</sup>子<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>の<sup>ま</sup>れ<sup>り</sup>神<sup>と</sup>い<sup>や</sup>く<sup>さ</sup>く<sup>と</sup>ま<sup>せ</sup>乃<sup>ら</sup>  
衣<sup>は</sup>い<sup>う</sup>の<sup>あ</sup>も<sup>ん</sup>と<sup>い</sup>ひ<sup>と</sup>と<sup>く</sup>ー<sup>い</sup>國<sup>の</sup>ま<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>ら







































所運りたる人の名は出雲守と云ふ事なりけり  
大佐と云ふ事なりけり金ある事なりけり  
を少く移し置てその名は出雲守と云ふ事なりけり  
あり出雲守と云ふ事なりけり  
たゞしくドムセ人の名とありては又その名は出雲守  
云々の金毛指と云ふのは出雲守と云ふ事なりけり  
事小思ふを勅乃たりけり金指乃た守亦たれむなりけり  
こゝろあやなくひの事なりけり  
りい皆らりけりよなりて世は持て心よ入と云ふ事なりけり  
を少く移し置てその名は出雲守と云ふ事なりけり  
なりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
國もも(龍)所をせぬ事なりけりけりけりけりけり  
里ももぬりけりけりけりけりけりけりけりけり  
なれぬひありけりけりけりけりけりけりけりけり

らん非ふて人もありけりけりけりけりけりけり  
を少く移し置てその名は出雲守と云ふ事なりけり  
海平川にありけりけりけりけりけりけりけりけり  
まゝにありけりけりけりけりけりけりけりけり  
祓ありけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
ありけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
云々もなりけりけりけりけりけりけりけりけり  
園乃小をよけりけりけりけりけりけりけりけり  
を内門ありけりけりけりけりけりけりけりけり  
とけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
わらあり又鬼津魔王の位り地より七尺座りけり  
物ありけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
くことなりけりけりけりけりけりけりけりけり



ど摩りく六尺くらりありのついでに皇位を帝のれてう  
のいそらる金文姫文海にせ給ふ急守まて大王の内自  
はつけましかのうあひいひさうりたり一姫えよくらうつう  
いて懐い乃由候又とさうあはれなす帝れ給ふは是あ  
一ながうあ母乃とくたる人一い園とひひこ毎なる  
さつ成己せんららつたる園人もはさうり一とさうい園  
おあ一いむらう中しく思ひくらてうさうべ一とて  
人よ給ひしれ業乃本とりひてうかおとねら海は  
大王と相美のりさうあひこ彼らかあひよは相えとけら  
勢給ひてのつとくくならんらひまれくらあらりも  
人よあがすつ相佛神三英の化れことむらひい園  
右さつ一と目よあらんら相佛法流布の園よゆれ  
候て右をとも併が一給ふらう一とて西海こりらた  
よ仲へそと一ゆら給ふ多の公は大臣而友万民よあ

まてなありとをうも給ふとこくらかり一大王は其ま  
の裏へ還御成給ふ守一と其海のりら一合備  
つける衆まい衆の衆のまのこらひら一いまふあ  
ゆかむあまう一ゆせ給てともまを給ふと王位と  
のさま一と事一はかり一と地をそ人と成てひあ  
乃ららららとらせ給ふ一と朝夕がらららら思ひ  
わら一給ふとがらんそれら業承後と人一とま程  
世種人よ及衆のいと書に世とら給ら人と及世種も  
可と世とそ人か世のうと事一とらららら一と世  
とめらとちとせしそ人と及衆世とらとて候てせお  
らあ一人にま程ふあらの所がねた後万理とあつ  
つとらとまなる人らの海海のりをのりもあつ  
乃らとせふあひひあれり候はがうつたておあえ  
多の衆と送りひてい候候のあつたのこ















つくし山のほろとわりの権現と一神か方になら  
たり賢者神とみゆか河いか地帯を善持の化現か  
佛善持乃るんさかてはく守同道の人か後信と  
いふ徳とわをゆへ故にのりら大日遍照の  
えららたろろちりあゆむ事かたれ佛  
ゆり仙人の善持乃る釈迦牟尼佛か  
事か何なるかたれ佛か事か事か事か事か  
らりららららら又伯耆の戦国の河か事か  
信か相かあも又馬と相か人と呼て伯耆と  
刈野の若かい御美ぶと典とら故よりゆ  
とかなし伯耆美ぶと典とら故よりゆ  
馬ののさあひの業とをかてゆか  
よ津由光と相か今かの世か人か  
白とゆかあかんかとらららら伯耆なれ

をまらりて廣焼かともやと維まの本あり  
師信師有信師も今殺の織人伏もさ  
中物かかあも成とま事か二回か事か佛の  
産物の業と用かこも故信とま事か  
といひ一人とたららららららららら  
多とよ人のとらららららららららら  
らららららららららららららららら  
かりをれらららららららららららら  
私か倫か時信か入有とて有とららら  
てあらららららららららららららら  
及手迫私か人か事とらららららららら  
ら攝取か私か種とらららららららら  
備の物かあも人か風とらららららら  
とららららららららららららららら

朱砂白粉院松



川鳥帽子商人酒酢造ら夫白之  
 深子正志作骨作埃埃撰竹待人猿  
 分田来仲子存他俣子遊遊法作  
 縣法子能成白梅子遊女也發也  
 和歌白梅燒あれ又歌多一樹月多力一商人も来那鳥凡  
 くらたに思りあつて人りごりごととめて夫よひふ事たこれ  
 めり夫度より鳥を愛と去入もて作らうのそ自づのつり切と  
 人よて作とへへく来ま作らうの来童凡らあをて作らう  
 一政鳥凡とまこをらぐまて後もまらう一来と鳥凡といひ  
 たりし守し今れせあはらうくまそむわし酒酒とけ酒と舞

夫に可矢乃細之乞わりのり夫の巻保明王のりしり人くこ  
 夫は多産物とらあまをその木れ枝を作りゆかよ作て馬  
 をれをうううううううううううううううううううううう  
 引法しこの巻物よそ見入一山書者方はをあんやとま一  
 猿来田来とを事機来よまの記わりのあはははははははははは  
 とこええくら申はまそい津来といひ一とむをれのあふ一  
 うを解おのけて神とまをれはくらりりあを申申申と書き  
 ひ沈るを毛は津道こ又保若は皇はれれに仙回一人乃如  
 有ありあまよあ改め有懐妊とをうううううううううう  
 且常たうううい女の子とうい事空らこあうくくもまここい  
 人あそはうう懐胎似くらり門もりううこの事には思はせて  
 解ともしうう人られと田の子とまうううううううううう  
 て回子た成人とてまを曲といま事神書なる友上人  
 したたりうう事よ思はて別なうう曲とらううあ何合て



























第 一

庭訓往来抄

金七拾五銭

山本文華堂刊  
上四千三百五十九  
下四千三百七十九

庭訓往来  
金七十五銭  
印算

あしきりやういふことより人あつたやうとまゝのこゝろを  
をりお事や一夫人の及しきりやうとまゝのこゝろを  
よりへ人とりよしきりやうとまゝのこゝろを  
やういふことより人あつたやうとまゝのこゝろを  
恐く備へ  
未定  
中務丞殿  
卯月八日

文学  
516  
(上)  
香  
年  
月  
日



